



## 日本の夫のジレンマ

にほん おと

土屋 賢二  
つちや けんじ

ほとんどの日本の家庭では、お金の管理は妻の仕事である。妻が働いていてもいなくても、夫は必要な金を妻からもらっている。財布のひもをにぎっている外国人の男から見ると、なぜこのような重要な権利を放棄するのか、理解できないだろう。実際、日本の男であるわたしにも、よく分からないのだ。

この習慣は最近始まったことではない。昔は、給料日になると、男がもらってきた給料を給料袋に入ったまま全額、妻に渡し、妻は「ありがとう」と感謝の気持ちを表していた。この儀式によって、夫は、一家を支えているのは自分だ、という誇りをもつことができたが、それとひきかえに、必要な金は妻にもらわなくてはならなかった。

最近では、給料は銀行に振り込まれるようになったため、この儀式は姿を消し、家計を管理する妻は、銀行からお金を引き出すだけでよかった。相当数の夫は、預金通帳がどこにあるかを知らず、ATMでお金を引き出すためのパスワードを教えられていない。

この結果、妻は「金は天から降ってくるもの」と思うようになり、夫は「金は妻にもらうもの」と思うよ

うになった。今では、夫が妻から必要な金をもらうときに「ありがとう」と感謝の気持ちを表すようになっている。

こうして、日本の妻は強くなり、日本の男は誇りを失った。日本の男たちは、給料を銀行に振り込む制度が悪いと考えているが、それは誤りである。銀行振り込みがあったとしても、預金通帳を夫が管理していればこのような事態にはならなかっただろう。原因は、給料を全額妻に渡す習慣にある。

わたしの推測では、この習慣の裏には、「お金にこだわるのは恥ずかしいことだ」という伝統的美意識がある。たしかに、立派な人物ならお金に細かくこだわることはないだろう。もし、男が、大富豪であるか、お金を必要としない人間であるか、本当にお金に無関心であるかであれば、立派な人物になるのに問題はなかっただろう。しかし残念なことに、ほとんどの日本の夫は、大富豪ではなく、お金がほしくてお金にこだわる人間である。そういう人間が立派な人物であろうとしてお金にこだわらない態度をとるところに、日本の夫の苦悩がある。立派な人物でありたい、しかしお金もほしい。これが日本の夫が抱えているジレンマである。

(お茶の水女子大学教授)